

二〇一七年度入学試験問題 (第二回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから15ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。 「」はそれぞれ一字と考えなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

太二のテニス部では、一年生がグーパーをして、人数の少ない側がコート整備をする伝統があり、今までは何とか平等に決まっていた。また、太二の父は訳あって会社を退職して豆腐屋に弟子入りしており、家族はそれぞれに忙しい。

「おい、末永。早く来いよ」

ぼくがみんなの輪にはいりかけたときに武藤がどなつて、ふりかえると末永が昇降口から出てきたところだった。長髪を、トレードマークのヘアバンドでまとめた末永が、長い手足をふって一気に迫ってくる。

「太二、パーな」

武藤は小声で言うと、そっぽをむいた。いままで一度もなかったことだが、みんながなにをしようとしているのかわかった。やめたほうがいいよ、ということばが口から出かかったときに末永が到着した。

「悪い悪い。給食のあと、腹が痛くなってさ」とおくれた言いわけをする末永を尻目に、「グーパー、じゃん」とみんなが声をだした。

「あつ」

自分だけがグーだとわかり、末永がしゃがみこんだ。うなだれた顔にかかった髪の毛のすきまから、とがらせた口が見えた。

「すげえ偶然だな。おい、末永。手伝ってやりたいのは山々だけど、よけいなことしたら先輩たちに怒られるからよ」

武藤は早口で言うと、さあ行こうぜというように右腕をふった。ぼくは残って末永と一緒にブラシをかけようかとおもったが、久保に肩をたたかれて、みんなにまぎって小走りで校舎にもどった。

たまたま末永がおくれたのかこつけて、武藤がワナをしかけたのだ。もしも末永と同時に到着していたら、ぼくもグーをだしていたかもしれない。ぎりぎりセーフと安堵するのと同時に、末永がキャプテンの中田さんか顧問の浅井先生にこのことを訴えたいへんだと不安がよぎった。

中田さんはふだんはおだやかだが、一度怒ると簡単には相手を許さなかった。夏休みの練習で、数人の二年生が日かげでサボっていたときには、自分も一緒にやるからと二

年生全員で二百回素振りをした。あらかじめ注意されていたのに、末永ひとりをはめたことがばれたら、どんな罰を与えられるかわからない。

こんなことなら武藤の言いなりになるんじゃないよかった、とぼくは後悔していた。でも、聞こえなかったふりをしてグーをだしていたとしても、自分だけいい子になりやがってと、みんなの反感を買っていただろう。

(中略)

「太二、どうした？ 早く来いよ。」

父と呼ばれて階段をおりていくと、テーブルに晩ごはんが並んでいた。まんなか麻婆豆腐をよそった大皿があり、となりの中皿には中華サラダと、おからをのせたトマトのスライス。味噌汁はシジミで、きざんだ万能ネギがふってあった。

「よし、食うぞ。腹がへって、もうガマンできん。いただきます」

ぼくがテーブルにつくなり父はレンゲで麻婆豆腐をすくい、猛烈な勢いで食べた。丸一日働いたあとなので、とにかくおなかですくらしい。もともと筋肉質だったからだがさらにたくましくなっていて、なかなか筋肉がつか

いはくは父がうらやましかった。もつとも、父も子どものころはクラスで一番小さいくらいで、背が伸びたのは高校生になってからだという。

「どうした、食わないのか？ うまいぞ、奮発して黒豚の挽肉を使ったからな。しかも豆腐は、おとうさんがつくった特選木綿豆腐だ」

修業を始めて一年半がすぎ、父はかなりの手ごたえを感じているようだった。このところ父の豆腐は一段とおいしくなっていたし、料理の腕まであがって、今夜の麻婆豆腐はこれまでで最高のおいしさだった。

「うん、うまい」と答えたとたん、ぼくは悲しくなって顔をふいた。

「おい、どうした？」ときかれても返事ができず、ぼくはトレーナーの袖で涙をふいた。

「部活かクラスで、うまいかないことでもあるのか？」

「あるけど、だいじょうぶ。自分たちでどうにかするから」

「そうか」

「うん。言っとくけど、おれがいじめられているわけじゃないからね」

かえって心配させてしまう言い方だったと気づいて顔を

あげると、父はそれ以上は何もきかずに、黙だまつてごはんをかきこんだ。

「よし、ごちそうさま。悪いが、おとうさんは風呂ふろにはいつて、そのまま休むぞ。一時間もすれば弓子が帰ってくるだろう。あいつも勉強で疲れているはずだから、おまえが麻婆豆腐や味噌汁を温めなおしてやってくれ。あと、あしたの朝はパンだからな」

午前二時半におきる父は、午後九時には寝ねてしまう。以前は夜中に酔よって帰ってくることもあったのに、このころは健康そのものの生活で、そうでなければおいしい豆腐はつくれないとのことだった。

高校二年生になった姉は、授業がおわったあとに、学校の近くにある図書館で勉強をしてから帰ってくる。帰宅は九時すぎで、いつも父とはすれちがいだった。塾じゅくに行けないぶんを自力でおきなおうとしているのだろうが、ぼくには姉が父をさげているようにも見えた。もっとも、母とはよく話をしているらしい。

「ねえ。おとうさん」と風呂場にむかおうとする父にぼくは声をかけた。

「なんだ、どうした」

<sup>B</sup>「このところ、腰こしはいいの？」

「良くもないが、悪くもない。いまギックリ腰をやるわけにはいかなからな。準備体操は念入りしているし、適度に動かしているほうがからだにはいいみたいだ。なんだ、おまえ、腰が痛いのか？」

「いや、そうじゃなくて」とぼくがためらっていると、父は息をついてイスにすわった。

「そうだな。豆腐屋になると決めてから、おとうさんは自分の仕事のことばかり考えていたからな」

独ひとりごとのようにつぶやき、父はダブルに両手をのせた。豆腐づくりを始めてから、父の手はふだんでも白くむくんでいた。冷たい水に手をつけることが多いので、タオルでふいてもどうにもならないのだという。

「頼たのみごとがあるなら、遠慮えんりょしないでいいぞ。なんだ、新しいラケットかシューズでも欲しいのか？」

「いや、そうじゃなくて、いつかまた家族四人でテニスをしたいとおもってさ」

ぼくが言うと、父はいったん視線をはずしてから小さくうなずいた。ほんの一年間だけだったが、ぼくが小学一年生のときは毎週土曜日に家族四人でテニススクールに通っ

ていた。練習のあいまに親チームと子どもチームでダブルスの試合をしたり、つぎのときは男チームと女チームで戦ったりと、本当に楽しかった。

「おとうさんたちのラケットも、とつてあるんでしょ？」

「ああ、ちゃんと押入れおしいれにしまつてある。おまえが小学生のときに使つていたラケットも一緒に四本まとめてとつてある。でも、使う前にガットをはりかえないとな」

「それならよかった。呼びとめてごめん、明日も早いでしょ」

「ああ、さつさと風呂にはいらないとな」

そう答えながらも、なかなかイスを立とうとしない父のまえで、ぼくは麻婆豆腐をたらふく食べた。

(中略)

■ 八時二十分をすぎたので、ネットのむこうは登校する生徒たちでいっぱいだった。武藤に、まちがつても今日はやるなよと X を刺さしておきたかったが、息が切れて、とても口をきくどころではなかった。

ラケットを持って四階まで階段をのぼりながら、ぼくは武藤と話さなくてよかつたとおもつた。ぼくが武藤を呼びとめていたら、ほかの一年生はぼくたちがなにを話してい

るのかと、気になつてしかたがなかつたにちがいない。武藤ではなく、久保か末永を呼びとめていても同じ不安が広がつていたはずだ。冷静に考えれば、きのうのことは一度きりの悪だくみとしておわらせるしかないわけだが、疑いだせばきりがないのも事実だった。

もしかすると、みんなは今日も末永をハメようとしていて、自分だけがそれを知らされていけないのかもしれない。もしかすると、きのうのしかえしに、末永がなにかしきけようとしているのかもしれない。もしかすると、二、三人の仲の良い者どうしでもうしあわせて、たとえ負けてもひとりにはならないように安全策をこうじているのかもしれない。

ウラでうちあわせ可能な手口がつきつき頭にうかび、これはおもっている以上に厄介やっかいだとぼくは頭を悩なやませた。

やはりキャプテンの中田さんに助けをもらうしかない。そうおもつたが、それをおもいとどまったのは、きのうから今日にかけて、一番きついおもいをしてるのは末永だと気づいたからだ。末永以外の一年生部員二十三人は、自分が加担した悪だくみのツケとして不安におちいつているにすぎない。それに対して末永は、今日もまたハメられる

かもしれないという恐れをかえながら朝練に出てきたのだ。最終的に中田さんに頼むとしても、まずはみんなで末永にあやまり、そのうえで相談するのが筋だろう。

そう結論したのは、三時間目のおわりぎわだった。おかげで授業はまるで頭に入っていなかったが、ぼくはようやく自分のすべきことがわかった気がした。そこでチャイムが鳴り、トイレに行こうと廊下ろうかに出ると、武藤が顔をうつむかせてこつちに歩いてくる。

「よお」

「おっ、おお」

武藤はおどろき、気弱げな笑顔をうかべた。そんな姿は見たことがなかったので、もしかすると自分から顧問の浅井先生かキャプテンの中田さんのうちあけたのではないかと、ぼくはおもった。

それなら、昼休みには浅井先生か中田さんがテニスコートに来るはずだ。たっぷり怒られるだろうが、それでケリがつくならかまわなかった。

給食の時間がおわり、ぼくはテニスコートにむかった。

しかし、集まったのは一年生だけだった。ぼくは落胆らくたんするのと同時に自分の甘あまさに腹が立った。

いつものように二十四人で輪をつくったが、誰の顔も緊張ちようで青ざめている。末永にいたっては、歯をくいしばりすぎて、こめかみとあごがびくびく動いていた。いまさらながらぼくは末永に悪いことをしたと反省した。

しかし、こんな状況じようきようで、きのうはハメて悪かったと末永にあやまつたら、どんな展開になるかわからない。武藤をはじめとするみんなからは、よけいなことを言いやがってどうらまれて、末永だつて怒りのやり場にこまるだろう。

だから、一番いいのは、このままふうにグーパーじゃんけんをすることだった。うまく分かれてくれればいいが、ぐうぜん、グーかパーがひとりになる可能性だってある。ハメるつもりがないのに、末永がまたひとりになってしまったら、事態はこじれて収拾しゆじつがつかなくなる。

みんなは青ざめた顔のまま、じゃんけんをしようとしていた。どうか、グーとパーが均等に分かれてほしい。

こぶしを顔の横に持ってきたとき、ぼくの頭に父の姿がうかんだ。一緒にテニススクールに通っていたころ、父は試合で会心のショットを決めると、応援おうえんしているぼくたちにむかってポーズをとった。ぼくや母も、同じポーズで父

にこたえた。

「グーパー、じゃん」

<sup>E</sup> かけ声にあわせて手をふりおろした。ぼくはチョコキをだしていた。本当はVサインのつもりだったが、この状況ではどうしたってチョコキにしか見えない。ぼく以外はパーが十五人でグーが八人。末永はパーで、武藤と久保はグーをだしていた。

ぼくが顔をあげると、むかひにいた久保と目があつた。

「太二、わかつたよ。おれもチョコキにするわ」

久保はそう言つてからグーからチョコキにかえると、とがらせた口から息を吐いた。

「なあ、武藤。グーパーはもうやめよう」

<sup>F</sup> 久保に言われて、武藤はくちびるを隠すように口をむすび、すばやくうなずいた。そして、武藤は握つていたこぶしから人差し指と中指を伸ばすと、ぼくにむかつてその手を突きだした。

武藤からのVサインをうけて、ぼくは末永にVサインを送った。末永は自分の手のひらを見つめながらパーをチョコキに変えて、輪のなかにさしだした。

<sup>G</sup> 一明日からのコート整備をどうするかは、放課後の練習の

あとで決めよう。時間もないし、今日はチョコキがブラシをかけるよ」

そういつて、ぼくが道具小屋にはいると、何人かの足音がつづいた。ふりかえると、久保と武藤と末永のあとにも四人がついてきて、ぼくは八本あるブラシを一本ずつ手わたした。

コート整備をするあいだ、誰も口をきかなかつた。ぼくの横には久保がいて、ブラシとブラシが離れないように歩幅をあわせて歩いていけると、きのうからのわだかまりが消えていく気がした。

となりのコートでは武藤と末永が並び、長身の二人は大大でブラシを引いていく。コートの端までくると、内側の武藤が歩幅を狭くしてきれいな弧を描き、直線にもどれば二人ともがまた大股になってブラシを引いていく。

ぼくたちはこれまでよりも強くなるだろう。チーム全体としても、もつともつと強くなれるはずだ。

ぼくはいつか、テニス部のみんなに、父がつくった豆腐を食べさせてやりたいとおもつた。さらに、このコートで家族四人でテニスをしたいとおもひ、押入れにしまつてある四本のラケットのことを考えた。ぼくはブラシを引きな

がら、胸の中で父と母と姉にむかってVサインを送った。

(佐川光晴『大きくなる日』による)

問一——線部A「ぼくは残って末永と一緒にブラシをかけようかとおもった」とあるが、それはなぜか、理由を説明しなさい。

問二——線部B「このところ、腰はいいの？」と声をかけた太二の気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の気持ちをうまく言葉に出来ないが、もつと父と話をしていたい、という気持ち。
- イ 自分には悩みがあるのだが、父はまともに取り合ってくれなくて残念だ、という気持ち。
- ウ 本人は全く気にしていないが、父の腰の具合のことが心配でたまらない、という気持ち。
- エ 何を話題にしてもすれちがってしまうので、共通の話題でわかり合いたい、という気持ち。

問三——線部C「なかなかイスを立とうとしない父のまえで、ぼくは麻婆豆腐をたらふく食べた」とあるが、「なかなかイスを立とうとしない父」の気持ちと、「たらふく食べた」太二の、父親に対する気持ちを、それぞれ説明しなさい。

問四 X にあてはまる適切な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 刀
- イ 杭くわ
- ウ 釘くぎ
- エ 針



問五 ——線部D「末永にいたっては、歯をくいしばりすぎて、こめかみとあごがびくびく動いていた」とあるが、ここから太二は、末永がどのような気持ちを持っていると考えたか。【】の範囲内の文章より二十五字以内で抜き出して答えなさい。

問六 ——線部E「かけ声にあわせて手をふりおろしたほくはチョコキをだしていた」とあるが、この「チョコキ」とは、太二にとってどのようなものだったか、答えなさい。

問七 ——線部F「武藤はくちびるを隠すように口をむすび、すばやくうなずいた」とあるが、この表情と行動からは、武藤のどのような気持ちを読み取れるか、説明しなさい。

問八 ——線部G「明日からのコート整備をどうするかは、放課後の練習のあとで決めよう。時間もなし、今日はチョコキがブラシをかけるよ」とあるが、今までテニス部の中で自己主張できなかった太二が仲間このような提案ができるようになったのはなぜか。「家族」「仲間」という言葉を必ず使って、百字以内で説明しなさい。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

近年、さまざまな企業や公的機関が不祥事を起こして謝罪会見を開くことが多くなった。事故を起こさないことが肝要だが、そこは人間技、完璧というわけにはいかないものだし、予想しない事態や大きな事故が発生する可能性をゼロにはできないものだ。いかに普段努力をしても、いったん事故や不祥事となれば、説明責任が求められる時代だから、説明だけでなく謝罪や釈明が避けられない。この種のことは、現代社会ではどのような業種でも起こりうる。

(1) 今回の事故の責任をとって、社長の職を辞すことにしました。

(2) 今回の事故の責任をとって、社長の職を辞することも視野に考えていかねばならないと思うわけであります。

気になるのは、会見での不用意な発言が問題を大きくし

たり、<sup>\*</sup>プレスとの接し方がまずいたために誤解されたりするケースが目立つことである。例えば、社長を辞めて責任をとることを述べるなら(1)のように言えばいい。(2)はことばをたくさん費やして丁寧<sup>①</sup>に説明しているようにも見えるが、実ははっきり辞めるとは言っていない。このことは直後に「でも今回は社長を辞めません」と続けることが(1)ではできないのに、(2)では可能なことからわかる。(2)は「検討の必要がある」と言っているだけで、その結果、辞めるかどうかは確定していないのだ。

長々ともったいつけて言っている割には不明確でわかりにくい。その上、【 X 】にも聞こえるから、真面目に聞いているとそのずるさに腹が立つ。報道に携わる記者も人の子であるから狡猾な態度には感情的になることがある。しかし、発言した本人は自分の言い方のせいで相手を怒らせていることに気づいていない。これでは危機は拡大する一方である。

どの組織にとっても危機管理は重要であるが、事実を説明する以外にも、みずからの考えや気持ちを伝える際の「ことばの危機管理」は時に個人にとっても重要なものになる。特に、私たちが日本語で表現する際に気をつけておく

べきことをここでは述べたい。

謝罪や釈明をするとき、人は当然のことながら「許してほしい」「わかってほしい」と思っていることを紡ぎだしていく。わざわざ相手を怒らせたり挑発したりするつもりも、けんかをするつもりもなく、ただ謝って許してもらい理解してもらおうと思っっているのに、不用意な一言が人を不愉快にさせ、怒らせてしまうことがある。「綸言汗のごとし」というが、別段、偉い人でなくても、いったん口から出たことを引っ込めることはできない。「前言撤回」と言っても、すべての人のキオクから消えてなくなるわけではないのだ。

言い回しの微妙な違いに強く反応してしまうのは、ことばに本音がにじみ出ているところを、私たちが鋭く嗅ぎとってしまうからだろう。もちろん、ことばの感性が鋭い人もそうでない人もいるから、すべての人がイチヨウに同じ反応をするわけではないが、聞く側が一字一句に注視している状況では、発言者が自分で思いもしないような解釈をされることだってあるのである。

俗に「文は人なり」というように、「Y」ものだと、多くの人は漠然と思っっている。これは一面真実を言い当て

ているようでありながら、必ずしもそうは言えないという面がある。書いた文章は形式性や儀礼性に縛られているから、私信や携帯メールでもない限り、本音は現れにくい。しかし、長く話していると本性や本音が見えてくるはずだと私たちは考えたくなる。少なくとも、文章から人間性を読み取るよりも話しことばから人柄を感じ取るほうが容易に思える。

ところが、話した内容が実質的に同じであっても、言い方によって強引で配慮の感じられない人柄に思えたり、逆に、優しい誠実な人に思えたりすることもある。人を不快にさせる言い方をする人がやはり傲慢で無遠慮な人物であることも少なくないが、嫌な言い方をするけれども、その実、悪意があるわけでもなく、不愉快な人物でもない場合も多い。悪意がないのに悪くとられるということは、誤解されているということにほかならない。

誤解されるのは、ことばの使い方をよく知らないか、不適切なことばづかいを不用意にしてしまうからだ。これは、ことばの使い方を知っていれば、あるいは、よく注意していれば、ほとんど回避できるものである。一方で、悪感情があり、また、誠意がないために、出てしまうことば

もある。もちろん、心の底でどう思っているかと、わざわざ悪い印象を与えようとする人はまずいない。できる限りことばの上では取り繕おうとするものだが、それでも本音がことばにまぎれて現れてしまうのである。

私たちは、日常生活の中で思うがままにことばをアヤツツって、まるでことばが空気のように無色透明なものに感じられ、その存在を意識しないことすらある。しかし、一度、ことばの存在を意識し始めると、ことばは壁のように感じられ、うまく伝わらないもどかしさに悩むことになる。I、ことばは隠しておきたい本音やさくられたくない悪意を表に出してしまうこともある。嘘をつくのもことばを使ってすることだが、嘘がばれるのもことばの端々に現れる真実のかけらがきつかけになるものだ。ことばは時に愚直なほどに真実に忠実なことがある。嘘をつくるのもことばなら、嘘をさらけ出すのもことばである。

謝罪会見で一生懸命頭を下げている人も、ユタンする本音がほろりと顔を出してしまうことがある。「申し訳ございません」と口では言いながらも、本心で「こっちの全面的な落ち度じゃないのに」「もっと悪いヤツがほかにいる

じゃないか」などと思っていると、ときとして、そういう考えがことばの端に現れてしまうのだ。ことばの感覚の鋭い人や、揚げ足をとろうとねらっている人は、そういうちよつとしたところに反応するわけである。

まず、ある謝罪会見で企業のトップが開口一番言ったつぎのことばを見ていただこう。

(3) 本日発生しました事故の件ですが、この件につきましては、誠に申し訳ありませんでした。

自分たちの会社が起こしてしまった事故について謝罪しているわけだから、特に問題はあるまいと思う人もいるかもしれない。確かに内容は謝罪以外に解釈しようがない。しかし、余計な「は」があることで、別の解釈が可能になり、それが聞き手を不愉快にさせるかもしれないのである。ここで言う「別の解釈」は、俗に「ニュアンス」と呼ばれることもあるが、科学的な言い方ではなく、もちろん専門用語でもない。しばらくは「別の解釈」「別の意味合い」などと呼ぶことにしよう。問題は、「は」が付くことで生じる新しい解釈である。

この「は」は、日本語を話す人ならおそらく使わない日がないくらいきわめて日常的なことばでありながら、意外と私たちはその意味や働きを正確に理解していないものだ。この「は」はときに限定の意味を表すことがある。「ビールは飲めないんです」と言うとき、「ビールは」の「は」は飲めないものをビールに限定する働きをしている。

謝罪の際に「この件については謝る」のように「は」を付けてしまうと、謝ることを「この件」に限定するという解釈も可能になる。この限定の意味を強めて解釈すると、「謝るのはこの件についてだけだ。この件以外について謝るつもりはない」という意味合いになる。さらに、これを情報として整理すると、「この件についてのみ謝るが、この件以外については謝らない。われわれの責任はこの件だけであり、この件以外に責任はない。われわれは全面的に悪いわけではなく、部分的に責めを負うに過ぎない」のように表すことができる。これをさらに簡略化すると、「一応謝るけどさ、そんなに悪くないだろ？」のようになってしまいかねない。もちろん、実際に口にしたことばには「俺たち、ちよつとは悪いところがあるだろうけど、それほど悪くないよ」という意味合いははっきり現れていない。しか

し、「は」が気になって、そのほつれた部分から飛び出して、糸を引っ張ってみたら、裏の裏側、奥の奥のほうから、そういう解釈がするすると出てきてしまった、ということはあるわけだ。

C とはいえ、たかが「は」程度のことである。聞き逃してしまいうことも、聞き逃さずともいちいち気にとめないこともあるだろう。顔で笑って心で泣くというように、腹の中で思っていることは表に出さず、その場に合わせて取りつころった建前を口にすることは、日本語の社会では珍しくない。本音が真意であるとすれば、建前は真意ではなく、便宜上ついた嘘のようなものである。だとすれば、儀礼的で表面的なことよりも、人が真意のほうを大切な情報だと考え、本音のほうに強く反応するのは自然なことだとも言える。

もちろん、謝罪をしている企業のトップが、迅速に対応し、誠実に対処しているのであれば、ちよつとした「は」はそれほど問題にならないだろう。それはとりよつたよつたよつたは失言かもしれないが、そこを責め立てるのはことばじりをとつておとしめようとする悪意ある行為に見え、言い立てる側が悪役になりかねない。

II

、いつまでたつても謝罪会見を開かず、対応

だつてなる。

も無責任で誠意が感じられない企業がやつと開いた謝罪会見でまず「この件については申し訳ありません」と言ったと

（加藤重広『その言い方が人を怒らせる』による。なお一部本文を省略しています）

したらどうだろうか。人は、行動や態度の誠意のなさとい

致する企業の本音をかいま見せる「は」に強く反応すること

【注】

だろう。このように、ことばは単なるきつかけに過ぎない

\*プレス——報道機関。マスコミ。

こともあるが、見せてはいけない正体をはしなくも露見し

\*狡猾——ずるがしこい。

てしまうことだつてあるわけである。また、対応に誠意が

\*綸言汗のごとし——君主の言葉は、一度出たら取り消し

ない企業が、ことばの上でだけ丁寧に謝罪しているとき

がきかないこと。

に、ぼろっとこういう「は」が出てきてしまうと、その本音

\*はしなくも——思いがけず。

が顔をのぞかせることで、人々の怒りに油を注ぐことに

問一

I

II

にあてはまる最も適切な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア さらに

イ しかし

ウ だから

エ つまり

問二 【X】にあてはまる適切な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 長広舌

イ 二枚舌

ウ 口減らし

エ 逃げ口上

問三 〔 Y 〕にあてはまる最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 文章からは、読み手が想像するような書き手の性格の一端い。たんなどは読み取れない
- イ 文章には書き手の人柄が現れ、話し方から話し手の人間性の一端がうかがえる
- ウ 文章をつくったり話したりするのが人間であって、文章が使えなければ人間とはいえない
- エ 文章を読むだけではなく、長時間語り合うことによって、はじめてその人の人柄が理解できる

問四 ー線部 A「文章から人間性を読み取るよりも話しことばから人柄を感じ取るほうが容易に思える」とあるがその理由を文中の言葉を用いて簡単に説明しなさい。

問五 ー線部 B「ほつれた部分から飛び出している糸」とあるが、それは何をたとえているのか、次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 揚げ足をとろうとする人が、攻撃こうげきするために取りあげる言葉。
- イ 世間の人が、企業や組織の説明に納得させられてしまう言葉。
- ウ 話している人が、自分たちの責任を軽くしようとして使う言葉。
- エ 聞いている人が、別の解釈を発見してしまうきっかけとなる言葉。

問六 ー線部 C「とはいえ、たかが『は』程度のことである」とあるが、「たかが『は』程度のこと」がそれほど問題にならない場合と、人々を怒らせてしまう場合の違いを、文中の言葉を用いて説明しなさい。

問七  
~~~~~  
部①⑤のカタカナを漢字に直し、漢字には読みがなをつけなさい。



